

【追悼】

佐藤博先生を偲んで

吉田 忠*

佐藤博先生は、本年2月8日、ご子息の祥月命日を前に奥さまと菩提寺に参られたが、ご夫妻が墓前に手を合わせてお参りをされた直後、佐藤先生は突然崩れるように倒れられた。すぐに救急車がよばれ救急病院に急がれたが、病院に着いて間もなく先生は息を引き取られた。死因は急性心筋梗塞、享年は82歳であった。

2006年10月、経済統計学会第50回総会（大阪経済大学）の閉会に際し、私は、「1957年7月、関西大学で開かれた経済統計学会の前身経済統計研究会第1回総会に参加された37名の会員の内、3名の方がこの第50回総会に出席しておられるが、本日ご出席の105名の方の一人でも多くが第100回総会に出席される事を祈りたい。」という言葉で閉会の辞を閉じた。その3名のお一人が佐藤博先生であった。佐藤先生は公務のため欠席された内海庫一郎先生に代わり、是永純弘先生とご一緒にこの第1回総会に出席しておられる。第50回大会の後、専修大学での第51回総会では懇親会で開催校を代表して歓迎の辞を述べられたし、桃山学院大学での第52回総会にも元気に出席された。札幌出身の先生は、おそらく北海学園大学での本年の総会を心待ちしておられた事であろう。

このように佐藤先生は内海先生らと経済統計研究会の創立に参加され、さらに第1回総会に出席されたが、その後も殆ど毎回総会に出席されて、深い学識と温厚なお人柄でこの学会を長年にわたって支えてこられた。経済

統計学会は、その創立者グループの重要な一人を失ったのである。

佐藤先生は1926年に札幌でお生まれになり、旧制札幌二中（現札幌西高校）をご卒業の後、海軍経理学校に入学された。海軍の主計将校養成のための学校であるが、奇しくも一学年下級に是永先生が在学しておられた。しかし在学中のお二人は面識がなかったようである。敗戦で海軍経理学校が廃校になった後、佐藤先生は改めて北海道大学法文学部に入学し、1951年に改組された法経学部を卒業される。ここで佐藤先生は内海先生と運命的な出会いをされた。（内海先生とその門下生との邂逅は「運命的」という形容詞が最も相応しいが、佐藤先生はその「運命的な出会い」の第1号である。そして佐藤ご夫妻は内海先生のご紹介による仲人第1号でもあった。誠に運命的である。）

毎日、弁当を二つ持って登校し勉強をするような毎日を経て卒業された後、先生は特別研究奨学生に採用され旧制大学院に進学された。5年間の奨学生期間を終了した1956年に大学院を退学し、一旦、北大助手に採用されたが、すぐに東北学院大学に赴任された（景気変動論担当）。その後、1964年には専修大学から招聘され、経済学部助教授に任ぜられる（経済統計学担当）。間もなく教授に昇進されたが、その後、1974からは2年間、経済学部長を務めておられる。そして1997年3月、定年によって専修大学を退職された。

次に佐藤先生のお仕事である。先生は、私なども含めて最近多くなった「少なく学びながら多くを発表する」研究者とは正反対であ

* 京都大学名誉教授

り、文字通り「多くを学びながら少なく発表する」研究者の典型であった。だからその構想を含めて先生の業績の全体像を把握する事は大変困難である。あえてそれをまとめるとすれば、次のようになるのではないだろうか。

まず、先生が旧制大学院入学時から仙台に赴任される頃まで集中された研究が、景気変動論で有名なツガン・バラノフスキーの経済理論であった。この研究はその後の先生のお仕事の基盤になったように思われる。この研究をまとめた『ツガン・バラノフスキーの経済理論にかんする研究』で北海道大学から経済学博士（旧制）を授与された（1962年）という事だけではない。ツガン・バラノフスキーの経済理論を把握評価するためにそれをめぐる論争をたんねんに追っていくという方法論、そして、それを理論としてだけでなく平均利潤率低下傾向のような統計現象の側面も合わせて把握していくという方法論をそこに見出す事ができるからである。

次に、先生はその旧制大学院時代にツガン・バラノフスキー研究と平行して統計学方法論・数理統計学批判にも取り組まれた。その成果は、わが学会の学会誌『統計学』創刊号を飾る論文「推計学批判—集団論に視点をおいて—」（1955）、及び『北大経済学研究』13号の「典型調査論の意義について」（1958）としてまず現れた。（因みに、この「典型調査論」を私は何回読ませてもらった事だろうか。）そして、この研究は内海・木村・三瀧編『統計学』第2講「統計学とはなにか」（1966）、内海編『社会科学のための統計学』第1章「社会・経済研究における統計および統計方法の意義」（1969）、「統計方法論」（学会誌『統計学』30号、1976）等へと展開されるのである。そこでは統計方法が、数理統計方法との対比において、また統計資料等による実証方法との関連において体系的に捉えられている。

第3は、先生の学位論文を直接的に継承す

る経済学史の分野である。内海先生の門下生グループは1975年、内海先生の還暦を祝しながら『講座 現代経済学批判』全3巻を日本評論社から刊行したが、佐藤先生はその第2巻『現代経済学の源流—学説史的検討—』の編集を担当された。そして第1章「近代経済学思想の発生—古典派経済学の解体過程における—」を執筆されたが、そこで先生は、近代経済学が古典派経済学解体の中から生成する過程を精密かつ批判的に追求しておられる。先生は、古典派経済学やマルクス経済学の古典に関する学問的関心を終生持ち続けておられたが、それは、次に見る統計学史研究で基盤の役割を果たしていたと見る事ができる。

佐藤先生の統計学史研究は、学会誌『統計学』第1号の「推計学批判」に始まったといえる。そこでは数理統計学史を追いながら集団論が検討されているからである。そして内海・木村・三瀧編『統計学』でも第3講「統計学の歴史」を担当しておられる。先生はこの頃『専修大学社会科学研究所月報』28号（1966）に「経済統計論の学説史の方法にかんする覚書」を書かれたが、そこでは経済統計論の学説史研究が次の二つの課題をもつ、とされている。一つは、経済学の法則定立を目指す実証過程で利用されてきた統計方法の展開を歴史的に把握する事であり、二つは、体系的な方法学としての経済統計学を構成する方法的諸手段の展開を歴史的に追及する事である。本来の課題であるべき後者はペティの方法体系から始められねばならないが、さらに重要なのはケトラー方法論の分析・評価である、とされた。この課題は、「統計学史におけるケトラーの位置づけにかんする覚書」（『同上月報』78号、1970）、「ケトラーにおける『統計学』と『社会物理学』の構想」（長屋政勝他編『統計と統計理論の社会的形成』、1999）で展開された。

そこで佐藤先生は、ケトラー体系を政治算

術（英）、大学派統計学（独）、確率論（仏）の「総合」と見る通説（わが国では蜷川虎三に始まる）への疑問提示から始められる。ケトレーの著は、統計調査を基礎におく社会統計学的方法とそれを人口・文化等へ適用した部分、及び平均人に関する確率的モデルによる社会物理学の構想の部分からなる事、即ち決して体系的な「総合」ではない事を示し、続いてその社会物理学の特質をコント「社会物理学」、コンドルセ「社会数学」との比較において明確にされた。

しかし、佐藤先生の統計学説史研究の最終目標がケトレーであったようには思えない。なぜなら、先生が1977年8月から一年間オランダのライデン大学に研究留学された後、『同上月報』190号（1979）に「統計学のルーツを尋ねて—オランダの1年—」を書かれたが、そこでその留学の目的として、幕末、西周や津田真道が学んだフィッセルリング統計学の特質をドイツ社会統計学との関連において明らかにする事を挙げておられる。（同時に、ケトレーに関する資料収集とその社会物理学の性格解明をも挙げておられるが…。）やはり先生の最終目的は、日本の社会統計学に大きな影響を与えたドイツ社会統計学の研究であったように思われる。そしてそれを、政治算術と大学派統計学の双方の強い影響のもと

で独自の「総合」を模索していたオランダの事例を通して、かつオランダから分離独立したばかりのベルギーで同じく「総合」を試みたケトレーとの対比において、研究しようとしておられたのではないだろうか。

今回、佐藤先生の追悼文執筆を編集部から依頼されたのを機にこのオランダ留学記を改めて拝読したが、そこで先生が18世紀オランダで活躍した統計学者のストリックやケルセボームについても関心を示しておられる事を知った。不勉強な私は、先生に25年も遅れて彼らの業績の意義に気づき、ここ数年その勉強を進めているところである。改めて、佐藤先生の卓越した語学力と群書博覧力、及び統計学説史に対する鋭く広いご関心に驚嘆させられたのである。私自身、日すでに暮なんとしているが、先生の壮大な構想のごく片隅をこつこつ追い続ける事をお誓いしたい。

佐藤博先生は二度と帰らぬ永い旅路につかれたが、しかしこの後も、遠くからあのいつもの温顔でわが経済統計学会をお見守り下さる事と思う。経済統計学会も先生のお顔を曇らせるような事があってはならないであろう。

最後に本稿執筆に際し、奥様の佐藤れい子様、経済統計学会の長屋政勝氏、福島利夫氏のお世話になった。心からお礼を申し上げたい。

執筆者紹介 (掲載順)

稲葉和夫	(立命館大学 経済学部)	橋本貴彦	(島根大学法文学部)
山田彌	(立命館大学 経済学部)	池田伸	(立命館大学 経営学部)
大井達雄	(藍野大学 保健医療学部)	吉田忠	(経済統計学会)
伊藤陽一	(日本統計研究所)		

支部名

事務局

北海道	062-8605	札幌市豊平区旭町 4-1-40 北海学園大学経済学部 (011-841-1161)	水野谷武志
東北	986-8580	石巻市南境新水戸 1 石巻専修大学経営学部 (0225-22-7711)	深川通寛
関東	171-8501	東京都豊島区池袋 3-34-1 立教大学経済学部 (03-3985-2332)	岩崎俊夫
関西	558-8585	大阪市住吉区杉本町 3-3-138 大阪市立大学大学院経営学研究科 (06-6605-2209)	藤井輝明
九州	812-8581	福岡市東区箱崎 6-19-1 九州大学経済学府経済学部 (092-642-2489)	加河茂美

編集委員

水野谷武志 (北海道)	前田修也 (東北)
山田茂 (関東) [副]	光藤昇 (関西) [長]
山口秋義 (九州)	

統計学 No.97

2009年9月30日 発行	発行所	経済統計学会 〒194-0298 東京都町田市相原町 4342 法政大学日本統計研究所内 TEL 042(783)2325 FAX 042(783)2332 http://www.soc.nii.ac.jp/ses/index.html
	発行人	代表者 木村和範
	発売所	株式会社 産業統計研究社 〒162-0801 東京都新宿区山吹町15番地 TEL 03(5206)7605 FAX 03(5206)7601 E-mail : sangyoutoukei@sight.ne.jp 代表者 品川宗典

STATISTICS

No. 97

2009 September

Articles

- International Competitiveness of the Japanese Firms
..... Kazuo INABA (1)

Note

- Productivity Measurement and Labor Quality
..... Takahiko HASHIMOTO and Hiroshi YAMADA (16)

Forum

- Sakae SUGI's life and contributions to theoretical statistics: an introductory commentary
..... Shin IKEDA (29)

Foreign Statistical Affairs

- 5th UNWTO International Conference on Tourism Statistics
..... Tatsuo OI (34)

Obituaries

- Hiroshi SATO (1926 – 2009)
..... Tadashi YOSHIDA (38)
- Hiroshi YOKOMOTO (1939 – 2009)
..... Yoichi ITO (41)

Activities of the Society

- The 53rd Session of the Society of Economic Statistics (44)
- Prospects for the Contribution to the Statistics (56)
- Regulation of the Editorial Committee (61)

JAPAN SOCIETY OF ECONOMIC STATISTICS
